

第1章 アフリカ諸国の部族構成

著者	原口 武彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	456
雑誌名	部族と国家 : その意味とコートジボワールの現実
ページ	11-18
発行年	1996
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00012983

第1部

部族の現実

第1章

アフリカ諸国の部族構成

第1部では、アフリカ諸国のなかからコートジボワールに焦点をあて、その部族構成、さらにそれらのうち数部族については、その実態を検討するが、まずその前に、アフリカ全体の部族構成を俯瞰的に検討しておこう。

表1-1は、アフリカ諸国に関する便覧的資料に依拠して作成したものである。まず、サハラ以南の48カ国（大陸近隣島嶼国を含む）全体で、部族とよばれる集団は、いくつ存在しているのだろうか。政府刊行物などで部族数が公表されている12カ国については、表1-1の「備考」欄に記しておいた。後述するように、独立以後の国家建設の過程で部族という存在が政治的に負の価値を帯びた存在となり、そのために部族に関する情報を積極的に公表することが少なくなった。

G・P・マードック (G.P. Murdock) は、アフリカ全体で48系統に分類して853以上の部族名 (tribal name) を数え上げている⁽¹⁾。しかし、そのなかには同じ部族に対する別名も含まれており、その数は必ずしも確定的とはいえない。

部族とは、後述するように出身、血縁的紐帯にもとづいて人びとが自己同定している集団であるがゆえに、それは原基的な母子集団に至るまで限りなく細分化可能な集団であり、逆に人種といった大分類にまとめあげることも可能である。そのどの水準を部族とよぶかということについて、客観的基準が存在するわけではない。また、中国や旧ユーゴスラビアの民族のように、法制的に部族を認定し、その数を確定する⁽²⁾という措置がとられた国はアフリカには存在しない。

表1-1 アフリカの部族と国家

国名	人口(万人) 1992年	独立年	旧宗主国	主要部族 ⁹⁾ ()内は総人口に占める比率%	備考 (部族数)
1 エジプト	5,243	1922	英	アラブ(99)	
2 リビア	455	1951	伊	アラブ+ベルベル(96)	
3 チュニジア	806	1956	仏	アラブ(90)	
4 アルジェリア	2,496	1962	〃	アラブ+ベルベル(90以上)	
5 モロッコ	2,506	1956	〃	アラブ(67)	
6 (サラウイ)	23	— ²⁾	ス	アラブ(?)	
7 モーリタニア	202	1960	仏	ムア(75), トウクロール(17), サラユレ(5), フラニ(1)	
8 セネガル	733	〃	〃	ウロフ(36), フラニ(18), セレール(17), ディオラ(9), マリンケ(9), トウクロール(7)	
9 マリ	921	〃	〃	バンバラ(31), フラニ(20)	20
10 ギニア	576	1958	〃	マリンケ(30), フラニ(28), スス(16), グベレ(11)	≒60
11 コートジボワール	1,198	1960	〃	バウレ(21), マリンケ(17), セヌフォ(13)	
12 アルケナフアン	899	〃	〃	モシ(50), ボボ(16), セヌフォ(7)	
13 ニジェール	773	〃	〃	ハウサ(46), ソンガイ(25)	
14 ベナン	462	〃	〃	フオン(25), ヨルバ(8), アジヤ(8)	
15 トーゴ	353	〃	〃 ⁴⁾	エベ(13), カブレ(13), フチ(11)	40
16 ガンビア	86	1965	英	マンディング語系諸部族(41), フラニ(14), ウォロフ(13)	15
17 シエラレオネ	415	1961	〃	メンデ(31), テムネ(30), グレオール(1)	
18 ガーナ	1,502	1957	〃	アシヤンティ(28), ダゴンバ(16), エベ(13), フアンテ(11)	374
19 ナイジェリア	10,854	1960	〃	ハウサ・フラニ(29), ヨルバ(20), イボ(17)	28
20 リベリア	258	1847	—	クペレ(21), バサ(16), ギオ(8), グル(8), 解放奴隷(1)	
21 ギニアビサウ	96	1973	ポ	フラニ(?), マンディング語系諸部族(?), ハフンテ(?)	
22 カーボベルデ	36	1975	〃	?	
23 カメルーン	1,152	1960	英仏 ⁵⁾	バミレケ(27), エウォンド(18), キルディ(15)	
24 コンゴ	223	〃	仏	コンゴ(45), テケ(20), プバンギ(16)	
25 ガボン	116	〃	〃	ファンダ(30), エシラ(15), アドウス(7)	
26 チャド	555	〃	〃	アラブ(46), サラ(?)	
27 中央アフリカ	301	〃	〃	バンダ(33), バヤ(29)	
28 サイール	3,739	〃	〃	コンゴ(34), モンゴ(16), ルバ(9), アザンテ(7)	250
29 ルワンダ	703	1962	ベ	ツツ(95), ツチ(4)	
30 ブルンジ	549	〃	〃 ⁶⁾	フツ(84), ツチ(14)	

31	サントメ&プリンシペ	12	1975	ポ	?		9
32	赤道ギニア	35	1968	ス	グビ(25), イボ(?)		
33	エチオピア	4,708	B. C. 100 ^{ph}	一	アムハラ(30), ガラ(40), ソマリ(6)		
34	エリトリア	275	1993	一	アフアール(?), ビレン(?), ティグリニヤ(?)		
35	ジブチ	44	1977	仏	ソマリ(?), アフアール(?)		
36	ソマリア	868	1960	英 伊 ^{ph}	ソマリ(95)	115	
37	スーダン	2,520	1956	英	アラブ(39), 南ナイル系諸部族(23)	≒40	
38	ケニア	2,359	1963	英	キクユ(19), ルヒヤ(13), ルオ(13), カンバ(11), カレンジン(10)	125	
39	ウガンダ	1,756	1962	英	ガンダ(16), ソガ(8), シユレ(8), テソ(8), キダ(7)		
40	アンゴラ	2,599	1961	英 ⁷⁾	スクマ(12), ヤオ(10), ジクラ(6), ハヤ(4), チヤガ(3)		
41	コンゴ	919	1975	ポ	オビアン(19), ムブンドウ(20), コンゴ(10), ルンダ(?)		
42	モザンビーク	1,420	1975	ポ	マクア・ロムウエ(40), トンガ(?) , マコンデ(?), ショナ(?)		
43	ザンビア	814	1964	英	ベンバフ(37), トンガ(19), ニヤンジャ(15), マンブエ(8)		
44	マラウイ	958	1980	英	チエフ(28), ニヤンジャ(15), ロムウエ(19), ヤオ(14)		
45	ジンバブエ	995	1980	英	シヨナ(75), インデベレ(16)		
46	スワジランド	75	1968	英	スワジ(100)		
47	ボツワナ	124	1966	英	バマングワト(31), バングワケツエ(11), バグウェナ(11)		8 clan
48	レソト	175	1975	英	ソト(95), スール(5)		
49	ナミビア	144	1990	南ア ⁸⁾	オバンボ(20), ヘレロ(7), ダマラ(?), カバンゴ(?)		
50	南アフ리카	3,796	1910	英	コーサ(25), スール(25), バベディ(10), ソト(9) [白人(71), 黒人(16), カラード(11), アジア(3)]		
51	マダガスカル	1,201	1960	仏	メリナ(26), ベツイミサラカ(15), ベツイレオ(12), ツミヘテイ(7)		
52	コモロ	54	1975	英	?		
53	モーリシャス	108	1968	英	?		
54	セイシエル	7	1976	英	?		

(注) 1) U.N., *World Population Prospects, The 1992 Revision*.
 2) 1976年独立宣言, アフリカ統一機構加盟国52カ国中26カ国が承認。
 3) Axoum王国。
 4) 元独領植民地, 第1次大戦後, 仏委任統治領。
 5) 元独領植民地, 第1次大戦後, 東カメルーンは仏, 西カメルーンは英の委任統治領。
 6) 元独領植民地, 第1次大戦後, ベルギー委任統治領。
 7) 北部は英保護領, 南部は伊領植民地。
 8) 大連部は, 元独領植民地。第1次大戦後, 英委任統治領。1964年, 英領植民地から独立したサンジバルと合邦し, タンザニア連合共和国となる。
 9) 元独領植民地, 第1次大戦後, 南ア委任統治領。
 (出所) D.G. Morrison, *Black Africa: A Comparative Handbook*, New York: The Free Press, 1972. *The Atlas of Africa*, Paris: édition jeune africain, 1973. *Africa Today*, London: Africa Journal, 1981. G.P. Murdock, *Africa: Its People and Their Culture History*, New York: McGraw-Hill Book Co., 1959.

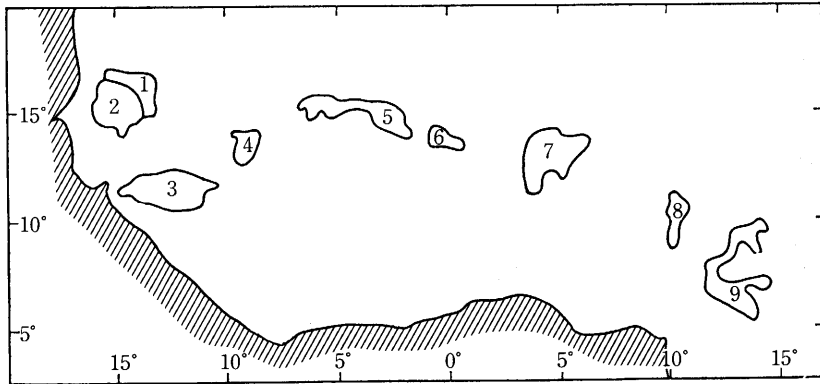
したがって、たとえば、1992年秋以来、内戦激化で世界の注目を集めているソマリア⁽³⁾において、抗争の主体として登場する武装政治勢力の支持母体、Dir, Isaq, Hawiye, Darodは、国際ジャーナリズムでは氏族 (clan) とよばれている。それは、これらの集団がソマリという上位集団を構成する下位集団であり、そのソマリがひとつの部族ないしは民族とみなされているためである。前述のマードックは、ソマリをアフールとともに48系統のひとつの分類名として掲げ、上記のIsaqなどは部族名として掲げている⁽⁴⁾。同様に、ツワナと概括されるボツワナ国の国民についても、マードックは、その構成要素であるングワトなどを部族としている⁽⁵⁾。しかし言語的には、ツワナ語として一括される言語をいずれの下位集団も使用している⁽⁶⁾。

以上に述べたような意味で、アフリカに現存する部族の数を確定することは、資料的にも定義的にも困難であるが、今日、アフリカ人が国内の日常生活において出自的に自己同定している最大の集団的単位が部族であり、それは、大体、マードックが部族名として掲げた水準のものである。したがってアフリカの部族数は、800内外であるといえよう。

マードックは、アフリカに存在する部族名を数えあげるとともに、それらの部族の居住地をアフリカの地図上に書き込んだ部族地図 (tribal map) を作成している。のちに検討するコートジボワールについても、マードックのそれよりもさらに詳細なコートジボワールだけの部族地図が政府刊行物として刊行されている。ということは、アフリカの部族は、一般に特定の一地域に定住していることを意味している。しかしこれには例外がある。

そのひとつは西アフリカのフラニ族⁽⁷⁾である。彼らは、図1-1に示したように西はセネガル川流域から東はカメルーンまでの広域に、今日のアフリカ諸国の各領土に点々と居住しているのである。その人口規模は1950年段階ですでに500万をこえると推計されているが、彼らが絶対的にはもとより、相対的にも多数派を占めている国は存在しない。マードックは、フラニ族を48系統のひとつとし、その下位集団の部族の水準としては、図1-1に示した9つの集団(ただしそのなかには、その居住地域名のみで固有のグループ名が存在し

図1-1 フラニ族の集住地域



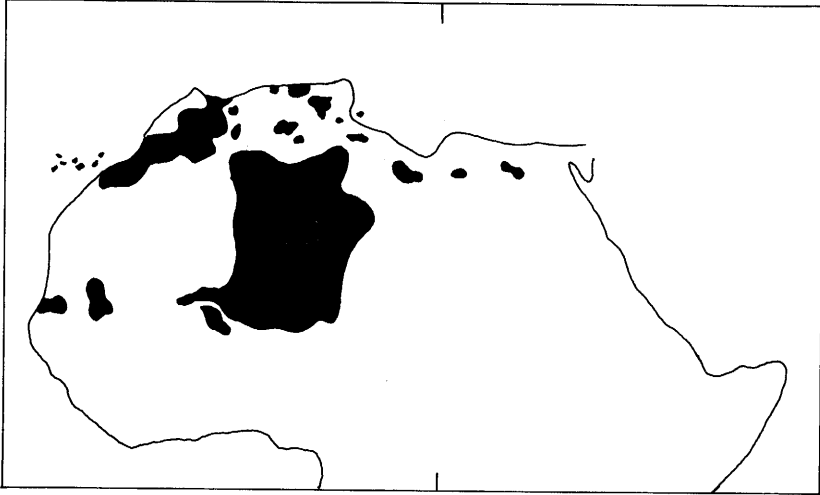
- | | | |
|------------|---------|---------|
| 1. セネガル川渓谷 | 4. キタ | 7. リコト |
| 2. フタトロ | 5. マシナ | 8. バウチ |
| 3. フタジャロン | 6. リプタコ | 9. アダマワ |

(出所) 表1-1に同じ, p.414.

ていないものもある)をあげている。またその身体的特徴(皮膚の色など)、生業(定着農耕, 遊牧)などの差異にもとづいて, A, B, 2つのグループに大別しているが, 使用している言語に関しては, 共通の一言語であるとしている。おそらく遊牧民とされるAグループの人びとが, 各地において先住の定着農耕民を征服, 融合することによって, 図1-1に示したような拠点が各地に形成されたものとおもわれる。フラニ族は, 居住地域の点在性という点では特異ではあるが, 言語の同一性, また当事者の自己同定の枠組みとして現存しているという点でひとつの部族とみなすべきであろう。

フラニ族と同じような存在として, これまた西アフリカの内陸部に点在しているトゥアレグ族がある。マードックによれば, トゥアレグ族はサハラ砂漠を中心に北アフリカから西アフリカ内陸にかけて点在しているベルベル系(図1-2参照)に属する一部族とされている。しかしそのトゥアレグ族自体の居住地域も, 各地に点在しているために, マードックはトゥアレグ族を48系

図1-2 ベルベル系諸族の居住地域



(出所) 表1-1に同じ, p.112.

統のひとつとしても掲げ、それを居住地域別に7つの下位集団に分類している⁽⁸⁾。彼らは人口的にも全体で50万人たらずであり、彼らが相対的にも多数を占める国家は存在しない。しかし、その異質性から近年、マリ、ニジェールなどで、中央国家権力に対する少数派反乱の母体となっている⁽⁹⁾。

同一言語という点で問題になるのは、これまた1990年代に入って抗争、大虐殺の主体となったルワンダ、ブルンジ両国にまたがって住むフツ族、ツチ族である。ツチ族もフツ族も、ルワンダでは、ルワンダ語、ブルンジではブルンジ語という共通の言語を使用しているとされている。ということは、同じフツあるいはツチでも、ルワンダ国民とブルンジ国民では異なった言語を話しているということになる。また両国のフツ族とツチ族は、部族地図を作成できるようなかたちでの棲み分けは行われていない。マードックは、部族名としては、ルワンダ、ルンジを掲げ、フツとツチは、両部族内の一種のカーストと位置づけている⁽¹⁰⁾。ツチ、フツあるいはルワンダ、ルンジのいずれを

部族として捉えるにしても、それらはアフリカの部族としてはきわめて特異な存在といえよう。

同一の言語という点では、もうひとつマダガスカル島の諸部族がある。諸部族の言語がどの程度、マダガスカル語と概括できるような状況にあるのか、その詳細は不明である。

以上に検討したように、アフリカ人の日常生活の出発的自己同定の最大の単位として存在する部族は、若干の例外はあるが、特定の居住地域をもち、言語などの文化的要素の相対的同質性を有している。その数は確定できないが、800内外であると推測される。

〔注〕 _____

- (1) G.P. Murdock, *Africa: Its Peoples and Their Culture History*, New York: McGraw-Hill Book Co., 1959. 同書末尾の“Index of Tribal Names”による。
- (2) 中国については、村田雄二郎「中国ナショナリズムと『最後の帝国』」(蓮實重彦・山内昌之編『いま、なぜ民族か』東京大学出版会, 1994年), 旧ユーゴスラビアについては、柴宜弘「民族自決から地域自決へ」(同上書所収)を参照のこと。
- (3) 原口武彦「ソマリア内戦, 民族, 部族, 氏族」(『アフリカレポート』No. 16, 1993年3月)。
- (4) Murdock, *Africa*..., pp. 318-320.
- (5) *Ibid.*, p. 386.
- (6) The World Bank, *Education in Sub-Saharan Africa*, Washington, D.C.: The World Bank, 1988.
- (7) フランス語圏では、プール (Peul) という族名が一般的である。
- (8) Murdock, *Africa*..., pp. 111, 405-409.
- (9) トゥアレグがかかわる西アフリカの近年の紛争問題については、Francis Kpatindé, “Le Combat des hommes de nulle part,” *Jeune Afrique*, n° 1751, du 28 juillet au 3 août 1994, を参照のこと。
- (10) Murdock, *Africa*..., pp. 347-350.

近年のルワンダ、ブルンジの紛争については、佐藤章「ブルンジ民主化の中のツチとツツ」(『アフリカレポート』No.17, 1993年9月), 同「ンダダエ暗殺後のブルンジ情勢」(『アフリカレポート』No.18, 1994年3月), 同「ルワンダ

—再燃した内戦の中のツチとフツ—」（『アフリカレポート』No.19, 1994年9月）を参照のこと。